人間科学研究　Vol. 23, Supplement (2010)

修士論文要旨

認知症高齢者のBPSDに対する介入の特徴
―個々の症状に焦点を当てて―

Method of intervention in behavioral psychological symptoms of dementia (BPSD) in elderly patients with dementia.
-Focusing on individual symptom-

足立　祐美子（Yumiko Adachi）　　指導：加瀬　裕子

【問題と目的】

BPSD（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia）という概念は、国際老年精神医学会（International Psychogeriatric Association：以下IPAとする）において提唱された（国際老年精神医学会、2005）。BPSDは、認知症患者にみられる記憶障害や見当識障害などのいわゆる認知症の中核症状以外の周辺症状を総称したものであり、そのなかには精神症状や行動障害などが含まれると定義されている（西村、2009）。BPSDは認知症疾患の重要な症状であり、介護者にとっても最も負担となる一方で、BPSDに対する適切な対応によって介護を続ける可能性が高くなると周知されている。BPSDに対する非薬物療法における介入についての研究は積み上がりつつあるが、まだ十分であるとは言えない。そこで、本研究では、認知症高齢者のBPSDに着目して、BPSDの個々の問題症状に対する特定の介入方法を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

分析対象：本研究では、「認知症患者に対するケアマネジメント・モデルの開発」研究による調査の中で、平成19年度の質問紙調査において収集されたデータを分析対象とする。

①BPSDへの介入状況について

BPSDに対してどのような介入が行われていたのかを明らかにするために、「認知症患者に対するケアマネジメント・モデルの開発」研究と同様、BPSDへの介入方法を「身体的・精神的健康」、「環境」、「能力を維持するための課題」、「コミュニケーション」、「家族・介護者状況」の５つの介入方法に分類した。それぞれの介入方法に該当する介入行動の項目を１つ選択するごとに１点加算し、合計をそれぞれの介入方法得点とした。介入方法の差について反復測定による一元配置分散分析を行った。解析には、統計ソフトSPSS for windows 15.0を用いた。

②BPSD症状別の介入方法の特徴について

BPSDの個々の問題症状に対する介入方法を明らかにするために、BPSD症状別および程度別の介入件数を算出した。症状別の介入方法の違いをみるために、個々のBPSD症状の介入方法の差について反復測定による一元配置分散分析を行った。解析には、統計ソフトSPSS for windows 15.0を用いた。

【結果】

①BPSDへの介入状況

BPSD症状への介入は、「身体的・精神的健康」、「環境」、「能力を維持するための課題」、「コミュニケーション」、「家族・介護者状況」の５つの介入方法のいずれかに分類された。全介入方法における各介入方法の占める割合は、「コミュニケーション」が27.7%を占め、次に「環境」が22.5%、そして「身体的・精神的健康」が21.8%、「能力を維持するための課題」が16.6%、「家族・介護者状況」が11.3%で、「能力を維持するための課題」と「家族・介護者状況」に比べて、「コミュニケーション」、「環境」、「身体的・精神的健康」が有意に多かった。

②BPSD症状別の介入方法の特徴

それぞれのBPSDの症状は、「コミュニケーションの介入が最も多い」、「身体的・精神的健康の介入が最も多い」、「環境の介入が最も多い」、「程度によって介入方法が変化する」のいずれかの症状に分類された。また、BPSDの症状によって、より多く介入している介入方法が異なっていた。

【結論】

BPSDに対する全体的な介入方法としては、「コミュニケーション」、「環境」、「身体的健康」の介入が、「能力を維持するための課題」や「家族・介護者状況」よりも多く行われていることが分かった。そして、個々のBPSD症状に対する介入については、BPSDの症状ごとに、より多く行われている介入方法があるということが示唆できた。しかし、個々のBPSDに対する特定の介入方法を明らかにするというところまでは至らなかった。また、BPSDの症状が多くなれば、問題を減らすために、介入を増やすということが考えられるが、すべての介入の介入数が多くなるわけではなく、BPSDの問題症状によって、介入数が増える介入方法があったり、減る介入方法があったりと差がみられた。このことから、BPSD症状の程度によって、つまり、BPSDの症状が多くなると、それに合わせて、介入方法を変化させて行っているという可能性も示唆できた。

今後の課題としては、個人の疾患、生活歴、性格、環境などを含めて分析すること、個々のBPSD症状に対して、特定の介入方法を行い、その効果を実証するという展開が望まれる。